

体操競技の鞍馬における演技構成の分析

—1996年世界選手権を中心に—

Eine Analyse der Übungsgestaltung am Pauschenpferd im Kunstturnen

— Weltmeisterschaften im 1996 —

佐藤 道雄

Michio SATO

I 緒論

近年、体操競技の技の急速な発展とともに、演技の採点に関わる規則も変化を余儀なくされてきた。そして更に選手やコーチはその新しい採点規則の中で、できるだけ10点満点に近づけられるような演技構成や作戦を考えるのである。1996年まで用いられた1993年版採点規則では、10点を獲得しようとした場合、高難度の技を多く演技に組み入れなければならない。技の難易度には、A難度からE難度までの5段階あり、E難度がもっとも難しい技ということになっている。この中で、D難度かE難度を行わないと、加点が得られず、10点には近づかないのである。加点等の詳細については後述するが、このような難度設定の中で、同じD難度やE難度の技でも、当然、より簡単なD難度技とかE難度に近いほど難しいD難度技、また同様に、E難度技の中にも難易の差があるわけである。すると、これも当然といえば当然のことではあるが、選手やコーチは同じ難度設定をされた技の中から、より簡単なD難度技、E難度技を選んで自分の演技構成に組み入れようとするのである。その結果生じることは、どの選手も似たような演技構成になることと、規則に違反しない範囲内で、自分ができる最も高い難度の技を、演技構成の中に繰り返し組み入れることである。同じ技を繰り返し行うことに関する規則についても後述したい。

上述した演技構成の傾向は、現在の日本選手には特に多く見受けられるように思われる。今年のオリンピックアトランタ大会では、日本の男子は団体戦10位、個人総合、種目別ともメダルなしという近年にない不振な成績に終わってしまった。このような結果になってしまった原因はいろいろあることと思うが、最近の日本選手の演技構成のモノトニー化や同じ技の繰り返しも原因の1つではないかと思われる。

このような考えから、本研究の目的は、世界のトップレベルの選手と日本のトップレベルの選手の演技構成を比較考察することによって、今後の日本の目指すべき方向、あるいは今後の対策を考える際の基礎資料を提供することにある。また、考察にあたっては1997年に改定され、2000年のシドニーオリンピックまで用いられる、新しい採点規則を考慮して行っていく。体操競技の男子における種目は6種目あり、そのすべての種目の合計で団体戦を順位が決定するわけであるが、今回の研究では、筆者が最近、最も多く審判を経験している鞍馬の種目に限定し、考察を進めていきたい。

II 体操競技の採点規則の概要

実際の演技構成の比較に入る前に、体操競技を採点する際の拠り所になる採点規則について、その概略を述べておく必要がある。

1. 採点規則の変化

体操競技の国際での採点規則は4年毎に国際体操連盟によって改定され、オリンピックの次の年から新しい採点規則に切り替えられることになっている。国内でもそれと同年に、国内版を日本体操協会が作成し、4月から新

採点規則を適用して、競技会を行っている。

1949年に体操競技の採点規則ができて以来、多くの変化を伴いながら現在に至っている。最近の大きな変化としては、1985年版で、今まで技の難度はA B Cの3段階だったものに、新たにその上の段階としてD難度を設定したことがあげられる。さらにその8年後の1993年版ではE難度にまで広げられたのである。そしてもう一つの大きな変化は、演技価値点の決定の仕方であろう。演技の最高点が10点であることは変化していないが、選手の技術が高くなり、その時の採点規則では10点を超えるような演技が多く出現してしまうと、10点以上の点数はつけられないので、複数の選手が10点を得てしまい、何人もの金メダリストを生み出すことになってしまったのである。そのような経緯から、より難しい演技内容でないと10点に近い得点を得られないように、規則が改定されてきたのである。1993年版採点規則を用いての競技会で、10点満点が出されたことを筆者は経験しなかったが、アトランタオリンピックなどは、かなり10点に近いところに多くの選手がひしめく状態になっていた。

2. 採点規則における加点について

体操競技のひとつの演技に対する最高点は10点であり、これは今まで変更されたことはないが、その10点の内容が大きく変化してきている。演技の構成には、まず決められた難度要求がある。跳馬を除く5種目では、複数の技を組み合わせで演技を構成するが、その構成される技に、最低組み入れなければならない難度が決められているのである。この要求難度に満たないような演技構成には減点がなされ、仮に実施を完璧に行ったとしても決して10点を得ることはできないことになる。この難度要求も変化してきているが、1993年版の採点規則では、ひとつのD難度技、2つのC難度技、3つのB難度技、4つのA難度技が要求されている。難度の他に、それぞれの種目で必ず行わなければいけない種類の技が3つずつ決められていて、ある特定の技に偏ることを防いでいる。これを特別要求というが、この種類の技を演技に組み入れなければ、減点対象となり、これも10点が不可能となる。この要求難度と特別要求の技をすべて組み入れて演技を構成すると10点が可能になるかということ、これだけでは10点にはならないのである。ここに加点というものが付け加えられる。1993年版の規則では、上記の要求難度と特別要求をちょうど満たしている演技構成で、9.10が満点の得点になる。つまりいかにに完璧に演技を行っても、9.10しか得られないのである。残りの0.90は加点の領域として、D難度やE難度の技を行った時に与えられるものなのであり、D難度技ひとつにつき0.10、E難度技ひとつにつき0.20の加点を得られることになる。演技の中にこれらの加点が0.90以上あった場合に初めて10点満点の可能性が出てくるのである。

この加点の考え方は1972年版の採点規則から導入されたが、その幅は0.60であり、また加点の内容も、1993年版のような高難度技に対してだけでなく、熟練性や独創性という領域にも加点が可能であった。このような加点の仕方は、1989年版の採点規則まで用いられ、比較的易しく10点満点の演技を構成することができたのである。そして、1997年版の新しい採点規則では、この加点の幅が1.40まで拡大され、より10点に近い得点を得ることが難しくなってきたといえる。まだこの規則での競技会は行われていないが、単純に考えて今までの得点より0.30から0.40程度低い得点になることは予想できる。ただし細かい規則が変更されているので単純に0.30下がることは言えない。^{注1)}

3. 技の繰り返しについて

ひとつの演技の中で同じ技を繰り返すことの制限は1993年版の採点規則で明記されていて、それ以前からの規則と変更はない。それはすなわち、同一の技は2回行うことはできるが、3回行った場合、これが減点の対象となるものである。これは如何に高い難度の技であっても3回行うことが許されず、その選手の得意な技だけに偏ることを防止したものであった。しかし、1993年版で上記のような加点の規則になって、多くの加点を、しかも高難度技だけで得ようとした場合、自分のできる高難度技を繰り返して行うことは、高得点を得るために非常に有利になる。そこで、多くの選手は、この規則に違反しないように、いくつかの高難度技を2回ずつ行うようになってきた。たとえば、2種類のE難度技ができる選手の場合、それを2回ずつ繰り返し演技に組み入れることによって、4つのE難度技の加点、すなわち0.80の加点を得ることが可能になるのである。更にもうひとつD難度技を2回繰り返せば、それで10点満点の演技構成ができるのである。

このような傾向は跳馬以外の種目で随所に見られ、筆者も含めた多くの審判員の眉をひそめさせていた。つまり、ひとつの演技としてみた場合、何度も同じ事ばかり行っているように見え、演技としての面白味に欠けるのである。確かに規則上は減点できないので、多くの加点技を行う選手はそれなりの高得点にならざるを得ず、審判員として、ジレンマにおちいるところであった。しかし、その種目のチャンピオンを決めるような世界のトップの争いでは、同じようなすばらしい実施であれば、やはりバラエティに富んだ演技構成をしている選手が金メダルを手にするのである。このよう傾向は、国際体操連盟の採点規則を作成している技術委員会のメンバーも感じていたようで、新しい1997年版の採点規則では、この技の繰り返しの規則に、より重い制限が加えられることになった。すなわち、同一技は従来どおり2回まで行うことができるのであるが、それはひとつの技のみに限るというものである。こうなると、選手がひとつのE難度技を2回行ってしまった時点で、もうそれ以後の技は1回ずつしか行うことができず、高得点を得るためには、否が応でもバラエティに富んだ、しかも高難度の技を行う必要に迫られることになる。

採点規則について、技の繰り返しと加点の規則を中心に、概略を述べたが、この後の考察の対象となる演技が行われた競技会は、このような1993年版の採点規則で採点が行われ、そしてこの規則が適用される最後の年の競技会である。来年度からは1997年版の新しい採点規則が適用され、この規則の中で日本も勝敗を争うわけであるので、まず現行規則での現状の考察と、その演技を新しい規則に照らし合わせた場合の考察を加え、今後の問題点と展望を明らかにしたい。

Ⅲ 世界選手権における鞍馬の演技構成

今回対象とした世界選手権大会は、1996年4月15日から20日までプエルトリコのサンファンで行われた、種目別のみの世界選手権である。同じ年の7月にはオリンピックアトランタ大会が行われたので、その前哨戦といってもよい大会であった。この大会は、まず各種目の予選が行われ、上位16名が準決勝に進出し、そこでの上位8名が決勝に出場するという形式で競技会が進められた。考察では、その鞍馬の予選に出場した62名の演技を対象として行った。

1. 演技構成における難度について

表1は、62名の選手が行ったB難度以上の技の数をまとめたものである。行われた技の総数は502個であり、選手ひとり当たり8.1個の技を行っていたことになる。難度別に見るとE難度とD難度がほぼひとり2個ずつ、C難度が1個、B難度が3個となっている。採点規則上、難度において減点されないためには、B難度以上の技は、前述したようにD難度ひとつ、C難度2つ、B難度3つの合計6つの技を最低行わなくてはならないわけであるが、高い難度の技を多く行えば、低い難度の技を行わなくてもそれをより高い難度の技で補える規則になっている。すなわち、仮にE難度技を6つ行えば、D、C、B難度技はひとつも行わなくても減点にはならないのである。C難度技がひとり平均1個と、少なくなっている原因は、D難度以上の技を平均4個行っているの、C難度技をわざわざ行わなくても減点にはならないということと、単独のC難度技では加点が得られないので、無理にC難度技を演技に組み入れる必要がないということが考えられる。

表1 世界選手権大会で行われた技の数

難 度	E 難度	D 難度	C 難度	B 難度
行われた技の数 (個)	119	126	64	193
出場選手に対する割合 (%)	192	203	103	311

表2は、各選手の演技構成の中での、D難度以上の技の数をまとめたものである。E難度技については、最高4つの技を演技に組み入れていて、それが8名の演技で行われた。最も数の多い演技構成は、3つのE難度技を行ったもので、18名の演技がそうであった。しかし、E難度技をひとつも行わなかった演技も13演技あり、選手によっては多くの加点を得られないようである。D難度技は、3名の演技が6個も組み入れており、全体としては1個から3個組み入れている演技が多いといえる。6個行っている演技は、その中の2人がE難度技を一つも行っていないものであり、E難度技ができない代わりに多くのD難度技で加点を稼いでいる演技であった。

表2 ひとつの演技におけるE, D難度技の数とその人数

E難度技	人数 (人)	割合 (%)	D難度技	人数 (人)	割合 (%)
4 個	8	12.9	6 個	3	4.8
3 個	18	29.0	5 個	3	4.8
2 個	13	21.0	4 個	2	3.2
1 個	10	16.1	3 個	13	21.0
0 個	13	21.0	2 個	14	22.6
			1 個	16	25.8
			0 個	11	17.7

2. 加点について

演技構成において前述した9.10という、要求難度と特別要求の技をちょうど満たして行われた得点に、行われたD・E難度技の加点を合計したものを、その演技の価値点と言い、これが10点に近づけば、高得点の可能性が高くなる。この価値点についてまとめたものが表3である。これを見ると62名の演技中、10点満点で構成したものが最も多く、17演技ある事が分かる。これは全体の27%にあたる。次に多いのが9.90の演技構成で19%になっている。9.90以上の演技価値点を持つ演技構成が全体の45%以上におよび、出場選手の約半数が、満点に近い演技構成であることが分かる。1997年版の採点規則から、加点の領域が広げられたことは前述したが、加点技を10点の上限を超えて加算していくと、この17演技のうち、2演技は10.1、更に2演技が10.2の価値点になるものであった。1993年版採点規則では、10点を越えても価値点がそれ以上になることはないもので、それ以上の加点技を行うことは、いわば無駄になるわけであるが、実際の演技を見ると、確かにほかの選手より技を豊富に行っている印象を受けることは確かである。このような演技は、1997年版採点規則での競技会でも、すぐに通用するものであろうと思われる。

表3 世界選手権における演技価値点の分布

価値点	10.0	9.90	9.80	9.70	9.60	9.50	9.40	9.30
人数 (人)	17	12	7	7	7	5	1	1
割合 (%)	27.4	19.4	11.3	11.3	11.3	8.0	1.6	1.6

3. 演技の中の技について

難度や加点については上記のような結果であったが、その内容、すなわち行われた具体的な技について分析してみよう。ここでは特に、主に加点の対象となる、E難度技とD難度技について、多く行われた技とその頻度を調べてみた。それをまとめたものが表4である。

E難度の技については、最も多く行われた技は、一把手上でシュテクリB^{注2)} 2回連続から縦向き旋回を2回まわる技である。これは27回行われ、行われた全てのE難度技の23%に及ぶ。次が一把手上下向き3/4転向で、24回、約20%。3番目が一把手上シュテクリB 3回連続から180°以上の転向が加わる技で、同様に21回、約18%。ここまでで、全てのE難度技の60%に達する。そのあとは、開脚旋回での1/1シュビンデル (12回、約10%)、一把手上縦向き旋回2回からシュテクリB 2回連続 (10回、約8%)と続いている。特に上記の3つの技に集中していることが分かる。

D難度技では、マジヤール移動 (馬端から馬端までの前移動4回) が最も多く26回行われた (20.6%)。次が、馬背のみの使用による馬端から馬端までの前移動2回で (19回、15.1%)、3番目が、両把手を挟んだ横

表4 多く行われたE, D難度技とその頻度

E難度技	頻度(回)	割合(%)
シュテクリB 2回～縦向き旋回2回	27	22.7
縦向き旋回2回～下向き3/4転向	24	20.2
シュテクリB 3回～180°以上の転向	21	17.6
開脚旋回での1/1シュビンデル	12	10.1
縦向き旋回2回～シュテクリB 2回	10	8.4
D難度技	頻度(回)	割合(%)
マジヤール移動	26	20.6
前移動2回 (馬端～馬端)	19	15.1
両把手を挟んで横向き旋回2回	17	13.5
シバド移動	13	10.3
シュテクリB 3回連続	8	6.3

向き旋回 2 回 (17回, 13.5%), 次いで, シバド移動 (馬端から馬端までの後移動 4 回) (13回, 10.3%) であった。

4. 技の繰り返しについて

次に, 行われた D および E 難度技が各々の演技構成でどれだけ繰り返されたかを見てみた。同一の技を 3 回繰り返した選手は当然いなかったが, 2 回繰り返している演技は数多く見られた。

まずひとつの E 難度技を 2 回繰り返していた演技が 21 演技, ひとつの D 難度技を繰り返していた演技が 9 演技, 合計 30 演技でひとつの同一の技を 2 回繰り返して行っていた。演技全体の 48% にあたる。

2 つの技を繰り返して行った演技は, 全部で 8 演技あり, その内訳は 2 つの D 難度技をそれぞれ繰り返しているのが 2 演技, 2 つの E 難度技をそれぞれ繰り返しているものが 2 演技, D 難度技と E 難度技をそれぞれひとつずつ繰り返しているものが 4 演技であった。これは演技全体の 12.9% にあたる。前述したように, 1997 年版の新しい採点規則ではこの繰り返しは認められず, 2 度目に繰り返された技は, 難度と加点が認められないようになる。

IV 日本国内における鞍馬の演技構成

考察の対象とした国内の競技会は, 上述の世界選手権とはほぼ同時期に開催された, オリンピックアトランタ大会の国内第 2 次予選会であり, 1996 年 4 月 5 日と 6 日に行われたものである。この 2 時予選会は, 前年の 11 月に行われた, 全日本選手権が一次予選となっていて, そこでの個人総合順位の上位 36 名だけが通過して行われるものである。つまり, 国内でのトップクラスの競技会であるといえる。この 36 名の鞍馬の演技構成を, 世界選手権と同様に細かく分析していった。

1. 演技構成における難度について

表 5 は, 36 名の選手が行った B 難度以上の技の数をまとめたものである。行われた技の総数は 246 個であり, 選手ひとり当たり 6.8 個の技を行っていたことになる。難度別に見ると E 難度がひとり 2 個, D 難度が 1.6 個, C 難度が 0.5 個, B 難度が 2.7 個となる。C 難度が少ないわけは, 世界選手権の場合で述べたことと同様な原因が考えられる。最低でも B 難度以上の技を 6 個は組み入れなければいけないことを考えると, かなりぎりぎりの技の数で演技を構成しているといえる。

表 6 は, 各選手の演技構成の中での, D 難度以上の技の数をまとめたものである。E 難度技については, 最高 4 つの技を演技に組み入れていて, それが 4 名の演技で行われていた。最も多い演技構成は, 2 つの E 難度を行ったもので, 14 演技あり, 次いでひとつ, 3 つの順になっている。E 難度技が 2 つとひとつの演技構成が 23 演技あり, これだけで 64% を占めている。D 難度については 2 個組み入れた演技が最も多く 10 名の演技があった。次いで, 1 個, 0 個, 3 個の順であり, もっとも多くの D 難度技を行っていた演技でも 4 個が最高であった。

表 5 2 次予選大会で行われた技の数

難 度	E 難度	D 難度	C 難度	B 難度
行われた技の数 (個)	75	57	18	96
出場選手に対する割合 (%)	208	158	50	267

表 6 ひとつの演技における E, D 難度技の数とその人数

E 難度技	人数 (人)	割合 (%)	D 難度技	人数 (人)	割合 (%)
4 個	4	11.1	4 個	2	5.6
3 個	7	19.4	3 個	7	19.4
2 個	14	38.9	2 個	10	27.8
1 個	9	25.0	1 個	9	25.0
0 個	2	5.6	0 個	8	22.2

2. 加点について

加点の数を比較する場合に, 世界選手権の場合と同様に価値点の比較を行った。全選手の価値点をまとめたものが表 7 である。これを見ると, 10 点から 9.40 までかなりばらつきがあり, 特に集中して多い価値点はないといえる。敢えて言えば, 9.80 が 7 名で最も多く, 9.50 が 2 名と少なくなっている。6 名の 10 点の価値点を持つ演技の中で, 実質 10 点を超えている演技は 1 名の演技のみで, それは 10.1 であった。

表7 2次予選大会における演技価値点の分布

価値点	10.0	9.90	9.80	9.70	9.60	9.50	9.40	9.30
人数(人)	6	5	7	5	6	2	5	0
割合(%)	16.7	13.9	19.4	13.9	16.7	5.6	13.9	0.0

3. 演技の中の技について

2次予選会の鞍馬で行われた演技の中の、E難度技とD難度技について、その頻度の多い技を挙げてみた。

それをまとめたものが表8であるが、E難度技については、一把手上縦向き旋回2回から一把手上下向き3/4転向が最も多く、31回行われ、E難度技の全体の41%にも及んでいる。次が、一把手上シュテクリBの3回連続から180°以上の転向が加わる技で、18回(24%)であった。この2つの技を合計すると、E難度技の65%を越えてしまっていることが分かる。日本のトップクラスの選手はこの2つの技に集中しているといえる。

D難度技になると、かなり技によって分散しているが、最も多い技がトンフェイ(馬端から馬端までの下向き正転向移動)であり(13回約23%)、次いで、ひとつの把手をとび越えた、馬端から馬端までの前移動(11回、約19%)となっている。そのあとは、シバド移動(8回、14%)、マジヤール移動(7回、12%)と続いている。

表8 多く行われたE、D難度技とその頻度

E難度技	頻度(回)	割合(%)
縦向き旋回2回～下向き3/4転向	31	41.3
シュテクリB3回～180°以上の転向	18	24.0
開脚旋回での1/1シュビンデル	7	9.3
シュテクリB2回～縦向き旋回2回	6	8.0
シュテクリB2回～下向き3/4転向	6	8.0
D難度技	頻度(回)	割合(%)
トンフェイ	13	22.8
ひとつの把手をとび越えた前移動	11	19.3
シバド移動	8	14.0
マジヤール移動	7	12.3
一把手上下向き全転向横移動	4	7.0

4. 技の繰り返しについて

世界選手権同様、2次予選においても同一の技を3回行った選手はいなかったが、2回の繰り返しは行われていた。

ひとつのE難度技を2回行っていた演技が13演技、ひとつのD難度技を2回行っていたものが4演技、合計17演技がひとつの同一の技を繰り返していた。これは総演技数の47%であった。

2つの同一技を繰り返し行っていた演技は4演技であり、それは、2つのE難度技をそれぞれ2回ずつ行っていた演技が1演技、ひとつのD難度技とひとつのE難度技をそれぞれ2回ずつ行っていた演技が3演技であった。これは全体の11%の割合であった。

V 世界選手権と国内2次予選との比較考察

以上、世界選手権大会と国内の2次予選大会での鞍馬の演技について分析したが、これらの競技会間での比較を行い、その差異を明らかにしたい。

1. 演技構成における難度について

B難度以上の技の個数を比較してみると世界選手権が8.1個、2次予選が6.8個であり、世界選手権の方がひとり平均1個以上多くの技を行っていることが分かる。難度の内訳では、E難度とB難度はほぼ同じ数であるが、D難度とC難度の数が、世界選手権の演技の方が上回っている。すなわち、世界選手権の演技の方が数多くの技を行っていて、それは主にD難度技とC難度技の数の違いによっている。

ひとつの演技におけるE難度の数は、どちらの競技会も4つが最高で、その演技の割合は世界選手権で12.9%、2次予選では11.1%と、わずかに世界選手権の方が大きい値を示しているが、それほど大きな差はない。しかし、

3つのE難度技を組み入れている演技では、世界選手権18演技(29.0%)、2次予選7演技(19.4%)と、世界選手権の演技の方がかなり上回っている、また逆に2個あるいはひとつのE難度技を入れた演技では、世界選手権より2次予選の方が、その割合がかなり多くなっていることが分かる。E難度技が行われなかった演技は圧倒的に世界選手権の方が上回っている。それぞれの個数の場合で、その割合の違いがまちまちであるが、最大が4つのE難度技であることには変わりがなく、その場合の割合も大きな差はないといえる。

ひとつの演技におけるD難度技の数では、世界選手権の演技の方がかなり多いこといえる。6つおよび5つのD難度技を入れている演技がそれぞれ3演技あり、4つのものも含めると8演技あることになる。それに対して、2次予選の方は4つが最高でそれが2演技しかないのである。この差が演技全体の技の差となって現れてきたことは明らかであろう。

2. 加点について

加点の指標として、それぞれの競技会での演技構成の価値点を算出したが、それを比較してみると、世界選手権の方が圧倒的に10点満点の演技構成が多いことが分かる。その割合の差は10%以上である。さらに9.9以上の価値点では、世界選手権46.7%、2次予選30.6%と、15%以上の開きになっている。この点に関しては、明らかに世界選手権の演技の方が、高得点を得られるものが多いと言わざるを得ない。

3. 演技の中の技について

E難度技の比較では、どちらの競技会でも、一把手上の技で多くのE難度を得ているが、明らかに2次予選の方が、ひとつの技に偏っているといえる。ひとつのE難度技がE難度技全体の41.3%も行われていることを考えると、おそらくこの技はE難度技としては比較的習得しやすい技なのではないかと予想される。

D難度技ではどちらの競技会でも大きな偏りはないが、世界選手権では、マジャール移動などの移動技がかなりの割合を占めているのに対し、2次予選では、下向き転向移動技であるトンフェイが、最も多く行われている。

4. 技の繰り返しについて

ひとつの技の繰り返しに関しては、どちらの競技会でも約半数の演技で行われており、これは、1997年からの新しい採点規則でも許されていることであり、大きな問題にはならない。

2つの技をそれぞれ2回ずつ行うことは、新しい1997年版採点規則では許されていないことはすでに述べたが、このような演技を行った割合は、どちらの競技会でもほぼ同数であった。1993年版の採点規則では許容しているわけであるから、繰り返すことのできる能力のある選手は、価値点を上げるために当然行ってくるものと思われる。この事は、どちらの競技会に出場した選手にとっても、今後解決しなければならない問題であろう。

VI ま と め

以上、1996年に行われた、世界選手権ブエルトリコ大会と、オリンピックアトランタ大会国内第2次選考会との鞍馬の演技構成について比較考察したが、日本における問題点と今後の展望についてまとめてみたい。

- ①技の数について、日本選手の演技構成は比較的少ない傾向が見られることから、もっと演技内容を豊富にすべきである。当然、長い演技を最後までやり通すだけの体力が必要になるであろう。
- ②上記の技の少なさの内容は、D難度技の実施数の差が大きな原因となっている。もちろんE難度技が数多くできることにこした事はないが、1997年版の採点規則を考えると、現在できるD難度技をもっと数多く演技に組み入れるべきである。
- ③加点技については、特にE難度技で、ひとつの技へのかなりの偏りが見られるので、多くの技に挑戦し、より難しい、世界にアピールできる技の習得が望まれる。
- ④技の繰り返しについては、1996年の競技会では世界との大きな差は見られなかったが、世界選手権でのD難度技の豊富さなどを考えると、早い時期から1997年版採点規則に対応できるようなトレーニングが必要とな

ろう。

最後に、この世界選手権プエルトリコ大会の鞍馬で優勝した、北朝鮮のペ・ギル・ス選手は、ひとつも同じ技を繰り返さずに、4つのE難度技、2つのD難度技を演技に組み入れ、10.2の価値点の演技を行ったことを付け加えておきたい。

注 釈

注1：1993年版採点規則では、加点の内容がD難度とE難度の高難度技に対して与えられることは書いたが、これに加えて技と技の組み合わせに対しても加点がなされる規則になっている。たとえば、D難度技とE難度技を連続して行くと、それぞれの難度の加点（0.1+0.2）に加えて組み合わせ加点が0.2与えられる。しかし、この組み合わせ加点の上限は、0.2までという規則になっているのである。それに対して、1997年版採点規則では、この組み合わせ加点の上限がなくなり、組み合わせ技を多く行くと、行った分だけ加点が与えられるのである。

注2：シュテクリBといい慣わされている技は、正確には、横向き支持から、上向き1/4正転向一把手上縦向き背面支持、下向き1/4逆転向一把手上横向き正面支持という技であり、B難度の価値のある技である。

参考・引用文献

- 1) International Gymnastics Federation . Code of points —Artistic gymnastics for men—, 1993
- 2) International Gymnastics Federation . Code of points —Artistic gymnastics for men—, 1997
- 3) 日本体操協会. 体操競技採点規則 男子, 1972
- 4) 日本体操協会. 体操競技採点規則 男子, 1989
- 5) 日本体操協会. 体操競技採点規則 男子, 1993